
空に馳せる想い【長期休載中】

臘条 司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空に馳せる想い【長期休載中】

【Zマーク】

Z9312B

【作者名】

臙条 司

【あらすじ】

天城空は、とある理由から旅をしていた。勝手気ままな、一人旅。その旅の途中、偶然立ち寄つたとある町で、空は少女と出会つ。それは偶然が紡ぎだす、恋の物語 その始まりだった。【長期休載中】です。再開の日処もたつておりませんが、完結させずに削除するつもりはありませんので、再開の折は宜しくお願ひ致します。このページを開いて下さり、真にありがとうございました

IJのお話を読む前に（補足説明）

蒼香「はい皆様、いんにちは。本作品『空に馳せる想い』のメインヒロイン、風原 蒼香です！！」

空「一応、主人公の天城 空だ」

蒼香「さてさて、早速ですが“田次ページ”を見ていただけましたか？『なんだこりや？』って思った方もいるんじゃないかな」と思いました」

空「確かに。“第 幕Aパート”とか、よくわからん目次だよな」

蒼香「本作品は少し特殊な形式を取らせていただいているので、その結果として『いつ』この目次になってしまった、というわけなんだなあ」

空「いいから、まわりくどいのはやめにして、サクッと説明してくれ」

蒼香「はーい。本作品では、ADLVゲームよりしぐ、お話の中で選択肢が現れることがあります。読者の皆様が『読みたいな~』と思つた方の選択肢を選んで、矢印で指示されたお話に進んでください」

空「ああ、それがAパートとかBパートとかいづれつか」

蒼香「せつだつす。基本的には一本道で、バッジエンダもないはずなので、気楽に読み進めていってください」

空「なんだか昔流行った“ゲームブック”みたいだな…… バッドエンドがないのは作者の力量の問題か」

蒼香「『みたい』というか、発想はそのまんま…… あ、ちなみに分岐が少ないのも作者のせい」

空「色々考え込んでた挙句、このザマか」

蒼香「やつやつ、選択肢によつてはヒロインが変わるとか、なんかそんなことも考えてるらしいよ」

空「色んなことを一度こで見るせじ器用じゃないせよ、無理をする……」

蒼香「なお、連載中は“最近投稿されたもの”を一番下に置いておきますが、次に新しく投稿した際に、見やすいように、毎次の並び替え”を行いますので、お話をすつ飛ばしたりしないように、この注意を願います」

空「お手数をお掛けしますが、何卒、宜しくお願ひ致します」

蒼香「それでは、本編をどうぞ……」

プロローグ（前書き）

あらすじ通り、恋愛モノです。

携帯読者様向けに、一話あたりができるだけ短く綴つていこうと
思っています。

“鍵作品”に大いに影響を受けているので、よく似た場面も多々
あると思いますが、どうか暖かい田で見守ってやって下さい。
それでは、『空に馳せる思い』、はじまります。

プロローグ

空。

この言葉から、何を想像できるだらうか？

暖かい空氣？ 柔らかな雲？ 心地良い風？ 澄んだ、蒼……？

いや、一面しか持ち得ない物は、この世には存在しない。そう、いかなるものであろうとも、一つではないのだ。

俺はぼんやりと町を歩きながら、くわえた煙草に火を点けた。時は夕方。刻限は五時になるくらいだらうか。

秋の夕暮れというのは、何とはなしに陰鬱な気分になるものだが、今日はいつにもまして鬱陶しく感じる。

早くも西に傾いた夕日は輝きを真紅に変え、その光を受けて、人も家も、何もかもが血の色に染まっていた。口先五センチほどのところにある、煙草の火でさえも淡く見える。

ふうっと、溜め息のように吐き出した白いはずの煙が、やはり血に変わつて空へと昇つていく。

俺はやはり、それをぼんやりと手で追つて、空を仰いだ。

そこにあつたのは、“赤”い空。

そして、その“赤”の中にあつてなお、”蒼”を見せる服を着た女の子が徐々に大きくなつていいく姿。

ん？ 女の子？ 何で女の子が空から……つて、うわあああ……！

……今思えば、よもまあ一人とも無事だったもんだと思つよ。なにせ、彼女はマンションの四階から飛び降りて、俺はそれを受け止める形になつたのだから。

これが俺、天城 空と、空になることを望む”自殺志願者”的女

の子、
風原
かざはら
蒼香あか
の出会いだった。

プロローグ（後書き）

いかがでしたでしょうか……って、まだ序盤もいいところなので、何とも言えませんよね。「めんなさい。更新は不定期になつてしまつと思ひますが、もし宜しければ今後ともお付き合い下さい。よろしくお願いいたします。

第一幕（前書き）

第一幕

!!

擬音ではとても表せないような大きな音。

強いて言つなら、夜空に上がる花火の音に似ている。

ただ違うのは、ひゅう～、という音が頭上から“近づいて”きて、どん、という音が体中を駆け巡る感じだ。

そして、花火ならばやや遅れてやつてくる空氣の波を何倍にも增幅したようなものすごい衝撃が、音と同時に全身を揺さぶる。

「「痛たたたた……」」

どういうわけかはわからないが、上から降つてきたのは大きな“尻”。

それと地面との間で、夢の世界に旅立つてしまいそうな意識を、首を振つて無理矢理に現実に引き戻す。

「あ～、生きてる……俺、生きてる……」

「あれ、生きてる？　わたし生きてる……？」

俺が生命の素晴らしさに触れていると、それを侮辱するような“何気ない”声が背中から聞こえてきた。

ちなみに、これは比喩的な表現ではない。体が触れ合つているためか、本当に体中に響いてくるように聞こえたのだ。

“上”の奴もどうやら生きている事を実感しているらしい。そこに籠められた感情が“喜”なのか“哀”なのかは知らんが、とりあえず一つ、言えることがあった。

重い！

「おい、感想は後にして、動けるなんならどうしてくれないか？」
できるだけ不機嫌さを声にしないよう、訴える。

「あ……ごめんなさい」

その時になつて、少女は俺が下にいることに気が付いたかのよう

そそくさと尻をどかした。

俺はようやく自由になつた身体を起き上がらせると、そつと自分の全身を見渡す。

かすり傷はいくつかあるが、大した事はなさそうだ。腕も動くし足も動く。バイオリンも無事。代わりにといつては何だが、“ズボン君”が重症だ。

いい奴だったんだけどな……

少女の方も大した怪我はないようだつた。俯きがちに「また失敗しちゃつた」などと、何か呟いてくる。

「で、キミはどこから来たんだ？　お空にお城があつて、そこから逃げてきた、とか？」

とりあえず、互いに大事無いことを確認すると、俺は事態の把握も兼ねて少女に尋ねてみた。素直な言い方ができないのは、俺にデフォルト備わつている属性だ。

「違うよ。わたしが来たのは　町の……」「

俺の問いかけに具体的な家の場所を説明し始めた彼女。

激しく脱力する……まさか皮肉を素で返されるとはね……

「そうじやない！　どうして上から降つてきたのかを聞いてるんだ」

「ああ、そっちか。それはね、あそこから飛んだから」

そう言つて少女は頭上のマンションの四階にある通路を指差した。それは結構高くて、この程度の怪我で済んでいるのが不思議なくらいだつた。

「飛んだって……まさかキミは背中に羽根があつて空を飛べちゃつたりするのか？」

「んむう～、そんなわけないじゃん

「んじや、自殺でもしようとしてたってのか？」

「うん、そう

は？　いや、冗談のつもりで言つたんだが……マジ？

「でも、失敗しちゃつた。てへへ……」

普通は運が良かつた、と云うべきなのだろうが、生憎あいにくと自殺志願者の心境など理解できようはずもない。

だから俺は、呆れ半分のまま、適当に相槌あいづちを打つておくことにした。正直これ以上、こんな変なヤツに関わってはいたくない。

「今度からは、下を確認してから飛ぶんだな」

「うん。そうするよ」

少女は屈託くったくなく笑つて見せた。

その笑顔は、自ら命を絶とうとするバカな輩やからとは程遠い、安らぎに満ちたものだった。

だからこそ、自ら命を絶とうとするバカな輩やからには到底見えない、可愛らしい少女だと言えた。

そんな少女が、なぜ自殺を望むのか、少しだけ興味が湧いた。興味の赴くままに、尋ねてみる。

「で、なんで死のうなんて考えたんだ？」

「……」

少女はちょっとだけ躊躇ためらいを見せてくれるり背中を向け、空を見上げながら言つた。

「アレに、なりたかったから……」

「アレ？」

「うん、『空』」

「へえ、『落ちれば』空になれるのか…… そいつは初めて聞く宗教だな」

俺は胸のポケットから煙草をつまみ出して、火を点けた。
この煙のよじこ、普通ならば“昇る”といつ発想の方が、空には近づけるような気がする。

だが返ってきた答えは、その予想を越えていた。

「そうすれば、『飛べる』ようになるはずだから……」
ますます聞いたことのない哲学である。

一度転落を経験すれば、人間飛べるようになるとでも言つのだと

うか、こいつは。それなら、^{さう}蝶の翼で太陽に近づいた男は、きっと空になつていることだろう。

馬鹿馬鹿しいにも程がある。

「 そりゃ……」

俺はやっぱり、適当に相槌を打つて煙を吐き出した。

第一幕（後書き）

いかがでしたでしょうか？
まだまだ序盤も序盤ですが、応援いただけると嬉しいです。

第一幕

「お兄さんは、止めないんだね……」

少女が、少し困惑したような表情を見せ、そう呟いた。
本当は止めて欲しかったのだろうか。しかし、俺は興味のないこ
とに行動しない主義だ。

知り合いならこぞ知らず、いきなり降つて来た見ず知らずの少女
の身を案じることなど有り得ない。その場限りの事態に労力を裂く
気など、さらさらないのだ。

「別に。好きにしたら良いだろ。俺には関係ない」

「ふーん……」

そう言つと少女は、ひょいと腰を曲げて、俺の顔を見上げるよ
うに覗き込んだ。

「普通は止めると思うんだけどなあ」

関心を持たれてしまつたのだろうか。興味津々といつた瞳で俺を
見ている。

その上田遣いの表情に、少しだけドキリとする。

「悪かつたな、普通じゃなくて」

恥ずかしさを隠すみつて、俺は毒と同時に思いつき少女の顔に

煙を吐いてやつた。

少女が、わふっ、と言つて顔を背ける。もちろん、これが俺の狙
いだ。

「もう、煙を吐き掛けるなんて無礼だよ！」

「上から^{ほの}押し掛かつてぐるのは無礼じゃないのか？」

「んむう……」

すると少女は頬を膨らませ、抗議の姿勢を取るが、しかしそうに
微笑む。

「そうだね。それじゃあお詫びに、ウチに『ご招待してあげる』

「招待されると、どんな特典が付いてくるんだ？」

「夕飯、つてのでどう?」

悪くない。来たばかりの町で、どうせ行く道もなかつたし、何より食事にありつけのはありがたい話だ。

俺は招待を受けることにした。

「乗つた!」

「受けた!」

少女は楽しそうに親指をぐつと立てると、血慢氣じまんげにふんぞり返る。逸らしすぎで体勢を崩し、転びそうにならなければもう少し締まつただろう。

慌てて腕を振り、体勢を立て直すと、少女は少しだけ頬ほおを赤らめて言つた。

「わたし、風原 蒼香」

「……俺は、天城 空だ」

「空……お兄ちゃん……」

「?」

急に驚きに目を見開いた少女 蒼香は小さな声で呟いて、しかしすぐにまた、嬉しそうな笑顔に戻る。本当に自殺を望んでいるとは思えないような笑顔。

その笑顔を見て、俺は不覚にも再び、胸の動悸じうきを感じてしまった。

慌てて煙草の煙を、深呼吸のように思いつきつ吐き出す。煙と共に、胸の動悸も消え去った。

「それじゃあ、家に案内するよ~」

そう言つと蒼香は、くるりと振り返り、一、二歩前へと踏み出す。俺はそれに倣つて歩を進めようとして、ふと思い出した。

「あ、バイクがあるんだ」

「なーんだ。じゃあそれに乗つて行こうよ

「ガソリン、切れてるけどな……」

「……」

結局、ただの荷物と化した二輪車を引き摺つて、町を歩くハメになつたことは、言ひまでもない。

第一幕（後書き）

いかがでしたでしょうか？
まだまだ序盤ですが、これからもよろしくお願いします。

第三幕

ただの荷物でしかない、走行能力を失つた一輪車を引き摺りながら歩く。

「この町は土地が余つていいのか、幸い、道は随分と広かつた。都會ならば一車線は当然、場所によつてはムリヤリ三車線にされていそうなくらいの、余裕たっぷりの車道。

歩道も大きな街路樹が植えられているにも関わらず、なお四、五人は横に並んで歩けそうなほど大きい。

おかげで車はおろか、すれ違う人にも気を遣わなくて済んでいた。

歩くこと数分、のんびりと歩いていた蒼香あかが、道の真ん中にも関わらず急に立ち止まって、思い出したよつとぽんと手を呂く。

「あ、そうだ。お買い物しなくちゃ」

「買い物？」

「うん。冷蔵庫の中、あんまり残つてなかつたと思つから」
そう言つてくると回ると、蒼香あかは楽しそうに微笑んだ。
「そんなに気を遣わなくていいぞ」

と、それに口先だけで応えてみる。本音と建前は別にしても、俺にだつて、このくらいの“社交辞令”を言つ心得はある。
が、それよりも何よりも、俺には早く通り着きたい理由があつた。
しかし蒼香は、「でも」と言つて、やっぱり笑う。

「せつかくお兄ちゃんが来てくれるんだし、やつぱり商店街に寄つて行こうよ」

“お兄ちゃん”といつのは、俺につけられた“あだ名”なんだろうか。

なんだか無性にこせばゆくて仕方がないが……まあ、眞にしないでおこう。

「……」

その商店街は、ここからどうなんだ？」

尋ねてみる。

「歩いて三十分くらいかな？」

「あ、さんじゅ……？」

その答えを聞いて、俺は愕然がくぜんとなつた。

この町のことは全くわからないため、俺は蒼香について行くしかないが、その蒼香はとつと、あつちでキョロキョロ、こつちでキョロキョロして、何ともゆっくりとした足取りである。

亀の歩みと等しい。

「なら、少し急がないか？」

俺はここだとばかりに促した。

何しろ俺は今、バイクを押して歩いているのだ。こんなペースで歩かれたのではたまたもんじゃない。

自慢じゃないが、このバイクはデカイ。ゆえに重い。

本来、押していくべきものじゃないコレに、蒼香は自転車と変わらないよつな感覚を持つているのかもしれないが、はつきり言って辛いのだ。

早々に何とかしたかった。

「もうじき、日も暮れるしな」

「うーん、そうだね。じゃあ少し急げっか」

蒼香はそう言うと、大げさなほどに大股で歩き始めた。それにつられて、腕の振りも大きくなる。

それが運動会で行進でもしているかのよつで、どこか可憐らしい。「はあ……」

だが俺には、それに微笑みかけるほどの余裕はなかつた。これみよがしに溜め息を吐いて見せる。

が、蒼香は全く揺るがない。

蒼香に聞こえないように毒づいて、重い鉄塊を引き回す。

「くそつ……」

また、溜め息が漏れた。

第四幕（前書き）

「Jのお話を読む前に、補足説明を「J」覗下せ。」

入り口に掲げられたアーチ それを彩るは、

『ようこそ、中央通り商店街へ』

という、なんとも“つまらない”、“ひねりない”、“珍しくない”、三拍子揃った名文句。

こういう場合、あたり障りのないものを選ぶのが、日本人という人種なんだろう。

脇に描かれているのは、コアラだろうか。にしては、少しばかり腕が長い。

耳の部分は欠けてしまったのか、その姿はナマケモノみたいにも見える。

商店街のアーチにコアラというのも脈絡がわからないが、ナマケモノではもつとイメージが悪かろうに。

早々に修繕することをお勧めしたい。

我ながら、いちいちケチをつけつつ、アーチを潜る。

商店街は、小さな町に反して以外に大きかった。造りもなかなかに凝っている。

中世のガス灯か何かを象つてているのか、小洒落た、色合い暖かな街灯が等間隔に並び立つ。

広いレンガ敷きの道路の両脇には、精肉店、鮮魚店、八百屋、惣菜屋、スーパー、ドラッグストア、ケーキ屋、和菓子屋、本屋、C D屋、喫茶店にファミレスにファーストフードと、一通りの店が軒を連ねている。

ここに来れば揃わないのは“大人のおもちゃ”くらいのものだろう。それにしたって、路地の奥の方にでも行けば、見つけられそうな気がする。

「まずは、ここでお買い物」「

と、楽しげにスーパーを指差す蒼香。

『まずは』という台詞がとても気になつたが、兎にも角にも俺は

腕を休めたかつた。

「俺はここで待つてるから、適当に済ませてくれ」

スーパーの駐輪場にバイクを止めて、煙草に火を点ける。最後の一本、とつておきだ。

「え？ 一緒に行こうよ

蒼香は大いに不満そうに頬を膨らませる。

だが、俺はそれに取り合わない。

「俺が行つても仕方ないだろ。それに、楽しみは取つておきたいしな。材料を見たら、今日のメニューがわかつちまう」

「むう」

膨らんだ頬に口も尖らせて抗議していくが、適当に腕を振つて促すと 相変わらず不満そうではあつたが 、蒼香はスーパーの奥に入つていった。

「さて、」

それを見届けると、俺は腕の凝りを解すため、ぐつと大きく伸びをした。

吐き出した煙が、風に乗つて飛んでいく。

冷たさを増した北風が、クソ重いバイクを押してきた今の火照つた体には心地良かつた と思つたのも束の間、すぐに体が冷える。動いて体を温めたくなつた。

「煙草でも買いに行くか……」

そこら辺を探せば、自販機くらいあるだろつ。温かいコーヒーも欲しいな。

眼前に真つ直ぐ伸びる道を眺めてみる。自販機らしいものは見受けられない。

「仕方ないな」

俺は適当にあたりを付けて、路地裏の通りへと入ることにした。

問題は、どっちへ行くかだな……

【選択】

左の道へ
右の道へ
第五幕、Aパートへ
第五幕、Bパートへ

第五幕 Aパート（前書き）

第五幕 Aパート

左の道へ入つてみた。

「煙草、煙草……」

しばらく歩いてみたが、相変わらず自販機は見つからない。ふと戻れるだらうか、と心配になるが、それほど複雑な道ではなかつたため、すぐに帰ることはできそうだ。

横手に見えた角を曲る。

するとそこには、小さな古い楽器屋が建つていた。商店街の道の造りに合わせたのか、こちらも赤いレンガが入り口を為している。

店の名前は『ア・カブリッヂオa c a p r i c c i o』 イタリア語で『自由自由に』といつ意味の音楽用語である。

「入つてみるか……」

気の向くままに、ドアの取っ手を握つてぐつと押す。

ガラス張りのドア、その上に据えられた呼び鈴が、カラカラと鳴つた。

中は、外面よりもずっと小奇麗だった。板張りの床と黒い櫻の柱が、歴史を窺わせる。

流行のエレキから、クラシックのギター。トランペッタやフルート、サックスや筆箋ひぢりきといった管楽器。マリンバやティンパニのよつな打楽器まで、様々な楽器が狭い店内に整然と並べられている。

そしてその奥、ガラスケースの中に、まるで絵画か彫刻を飾るかのように、美しく艶やかな光を放つバイオリンが立てかけてあつた。

「……」

思わず、息を呑む。それほどに、このバイオリンは妖艶な輝きを持つていた。

「気に入つたかね？」

「うをつけ！」

と、耳のすぐ傍で、しゃがれた声が響いた。

この店の主人だろうか。驚いて飛び退くと、一人の老人が立っていた。

「随分と見入つていたようじゃが」

老人は、深く刻まれた皺に沿つてニヤリと笑む。

白髪混じり……もとい、量の少ない白髪そのものの頭に赤い野球帽を被り、赤い半纏に黒いモンペのようなズボンを履いて、おまけに年代物のパイプまで咥えている。

いかにも胡散臭い。

この爺さん、ひょっとするとこの店よりも古いんじゃないかな？

俺は激しく動悸のする胸を押さえて（怒りを鎮める意味も込めて）一、二回深く息をつく。それでやっと呼吸が整つた。

「いきなり耳元で話しかけるんじゃない……」

「いや、すまんすまん。久しぶりの密じやつだから、ついからかってやりたくなつた」

そんなことをしてるから、密足が遠のくんじゃないのか……？

「ところでお前さん、見ない顔じやのう」

「今さつき、この町に来たところだからな」

「旅行が何かかる？」

「そんなところだ……」

ジジイ（こんなヤツ、ジジイで十分だ）は、パイプでふかふかと煙の輪つかを作りながら、「よくまあ、こんな何もないところに……」などとブツクサ呟き、宙を仰ぐ。

その視線が俺から外れたのを見て、俺はこいつそりと店を出て行

「とこりでー！」

こつとして、再び耳元で声を掛けられた。しかも今度は、大声で。唾液のおまけも付いた。

「だから耳元で話しかけるなと言つてるだろー！」

「随分と見入つていたよつじゅが、このバイオリンが氣に入つたのか？」

「さつさも回じ」とを言つていたが……

「さう言つてやると、ジジイは、

「じゃが、その答えは聞いておらん」

と、そつけなく答へ（やがつ）た。

ボケてるわけじゃあないらしにな。面倒だが、正直に吐かないと帰れなさそうだ。

「見入つてはいたが…… 気に入つたかどうかは別だな」

「さうか……」

するとジジイは、急にしおりこくなつて、独り言のよつて騒き出した。

「これは、ワシが若い頃に作ったものでな。今もこつして飾つているのだが、お前さんのよつに、足を止めてまで見てくれる者はなくてのぉ…… 最近は皆、やかましい音を出す物ばかりを欲しがるわい」

「さう言つと、急にまた一やつと笑い、「時代なのかの」と続けた。俺も電気的な音でガリガリと鳴らす音楽はあまり好きではなかつたが、このジジイはそれも楽器、音楽の一つだと、否定はしていいようだ（無論、俺もそつだが）。

心底、音楽が好きなのだつ。少しだけ、親近感が沸いた。

「お前さんも、音楽をやるのか？」

ジジイがパイプをふかしながら、尋ねてくる。

そういうえば、煙草の煙は樂器に良くないと思つんだが……まあ、空調がしつかりしているのだから、といつとで納得する。

「ああ。バイオリンを少しな」

「ほつ、お前さんもバイオリンか。奇遇じゅの」

ジジイが嬉しそうに笑う。久しぶりの仲間を見つけた、といつところか。

こつ之間にか、先ほどの偏屈へんくつとも消えていた。

「ちゃんと手入れはしてあるか?」

「まあ、多少は、な。旅の身では限界があるが……」

「ならば今度、持つてきなさい。特別に、格安で請け負つてやるつ

前言撤回。

「手入れくらい、タダでやつてくれ」

「バカこくでねーわい。こっちもコレで飯を食つとるんじゃ
やつぱり偏屈ジジイだ、」
「ひつは。

「気が向いたらな……」

俺は、溜め息を吐きつつ出口へ向かいつつ、上着のポケットをまわぐつた。そこに煙草の箱はなかつた。思わず、ちっ、と舌を鳴らす。

すると、それを聞き取つたのか、

「煙草なら、正面の角を曲つて少し行つた所に売つとるやつへ
と、ジジイが後ろから声を掛けてくれた。

耳元で囁かれなくて良かつた。

俺は出口の扉を開けると……

【選択】

後ろ手を上げて、そのまま店を後にした。

第六幕へ

まあ、一応は礼をしておくか……

ルート#1へ

星野 輝琉

第五幕 Aパート（後書き）

いかがだつたでしょうか？

このように時々、分岐して話が進んでいきます。混乱してしまうかもしれません、どうぞお許しください。

ちなみに、次回の分岐”???”は……

お楽しみに

第五幕 Bパート

右の道を曲つてみる。

随分と細い道だった。

ここにも店が連なつてゐるのかと思ひきや、並ぶは店の裏口の扉か「ミニ箱、またはダンボール。

ふと、その中身が気になつたが、仔猫でも出できたら面倒なので、見ないことにする。

ふむ、これは“路地”といつやつだな、完全に。パーフェクト驚くほどに何もない。

それでも、せっかくここまで来たのだ。引き返すのも馬鹿らしくので、ひたすら先に進んでみることにした。

路地を抜ける ああ、何もない。

道が広くなつた ふう、何もない。

視界が開けてくる ちつ、何もない。

ついに建物がなくなつた くそ、やっぱり何もない。

「何だか、どんどん違つとこに向かつてゐるような……」

行けども行けども、自動販売機は見つからない どこのか、商店街の喧騒けんそうもあつという間になくなり、人気のない、街路樹の立ち並ぶ無駄に広い道が続くばかりになつてしまつた。

「煙草どころか、飲み物の自販機もないなんて、どんな田舎なんだよ、ここは……」

冷たい空氣に溶ける白い息を見送つて、少しだけ視線を上げてみる。

都會には有り得ない、開けた頭上。

「ここの一帯は開拓中なのか、はたまた単に空地なのか、視界を遮るビルはおひか、建物自体ほとんどなく、遠くまでも見渡せる。こんなところに道を作る理由があつたのかと、疑問が湧くほどだが、その疑問は次第に大きくなる建物によつて、解消される。

「病院、か」

白い壁に、ワンポイントの飾りのように赤い十字が引かれている。ぽつんと寂しげに一人取り残された、広場のゆきだるまのようだ。それが寂しい風景に拍車をかけている。

そりやまあ、排気ガスが入り込んでくるよつな病室よりはずつといいだろうが……

「あ、そうだ。病院の中なら、自販機くらいあるんじゃないかな？」

さすがに煙草はないだろうが、コーヒーくらいは買えるだろう。ふと思いついた名案は、しかし足を病院に向かた途端に翳りを見せる。

「コーヒー買うためだけに、病院つて入つていいもんか……？」

それに、俺は病院というところが大嫌いだった。

あの薬臭い匂い。雑多な人間。想像するだけで嫌気が刺す。

「やめた」

煙草もコーヒーも諦めて、結局戻ることにする。

持ち上げかけた右足をそのままに、ぐるりと回れ右。来た道を辿つていく。

ほぼ一本道だったから、迷うことはないだろう。

ほぼ一本道だったから、どのくらい歩いていたか、時間の感覚が失われてしまつていてることが問題だが。

ぴゅう、と鳴きながら、北風が正面から吹きつけてくる。周囲に

建物がないせいか、風は強い。

襟元を両手で押さえて、俺はもと来た道を戻つていった。

（えりもと）

病室の窓から、少女が虚ろな瞳を向けていた。

【第六幕へ】

第五幕　Bパート（後書き）

いかがだったでしょうか？

このように時々、分岐選択をしてお話を進めていくようになります。

基本的には一本道なので、あまり気にせず楽しんでいただければ、と思います。

星野 輝琉ルート#1（前書き）

予想通りとは思いますが、これは別ヒロインのルートになります。
ヒロインの名前は…… それは後ほど。

星野 輝琉ルート#1

俺は扉を開けたものの、一応、礼はしておるべきだなうと思い、振り返った。

その時、

「あら、お客様さん？」

奥の方から声が聞こえてきた。

それを追うように、少女がふわりとした優雅な足取りで姿を現す。

瞬間、薄暗い店内に、その少女の立つ場所だけが柔らかな光に包まれたような錯覚に陥った。
どこまでも透き通る白い肌。

風が吹けば飛んでしまって思ひながらの、華奢な体つき。

そして何よりも、その小さな顔の内にある瞳はどこまでも澄み渡つていて、見つめいたら吸い込まれていってしまう。

「いらっしゃい」

少女がにこりと微笑む。

「あ、ああ……」

少女が全く邪気のない微笑をするもんだから、見つめていた自分に非があるような気がしてきて（いや、実際他人を凝視するのはあまりよくないことだが）、何だか急にばつが悪くなってしまった。

俺は思わず、視線を下に逸らす。

彼女の細い脚を、これまた細い黒のジーンズが覆っている。

上着は、その手の男なら感涙物の大きめのワイシャツ。の、
上に深緑色のエプロンを身に付け、頭に赤いバンダナ、軍手をはめた手には何故か金鑑かなやすりを持つていた。

しかもよく見れば、全身埃ほじりに塗れているのか、粉っぽくなっている。

ああ、『柔らかな光』と思つたのは、舞い上がつた埃に日の光が当たつて、それで白く見えていたんだな……

少女は一、二歩、俺の方に歩み寄ると、頭に巻いていたバンダナを取る。

はらりと解ける艶やかで長い黒髪は、彼女の肢体をよりはつきりとさせようつて、とてもよく似合つてゐる。

その黒髪を皿戻すように、少女は軽く頭を振つた。

同時に舞う、大量のほこ　　げほつ　　り　　埃。

「あ、」め　　けほ、けほ……　あはは、」めん」めん」

今度は微笑ではなく、可笑しそうに笑う少女。

これはもう、営業向きの笑い方じゃないな。初対面、しかも密と店員という関係だというのに、随分フランクな対応だ。

埃を撒き散らしておいてそれかよ……つてな気分にもなる。

俺はいかにも迷惑そうな顔をして片手で口を押さえつつ、もう一方で顔の前をパタパタと扇ぐ。

こんなことで埃がいなくなつてくれるはずはないのだが、ま、精神衛生上の問題だらう。

そういうばどうして、無駄だとわかっているのにやつてしまつんだろうな、」。

パタパタを続けつつ、一応は文句を言つておく。

「一応、客なんだけどな、俺……」

「だから」めんつてば……　奥で作業してたもんだから……　本当

にごめんなさい

「ま、いいけどな」

他人から受ける無礼も、相手によつて随分と心境が変わつてくるもんだ。

あのジジイだったら今頃、問答無用で張り倒してくるな、きっと。

当のジジイは「商品を汚すなどいつも……」と、愚痴々々と呟いて

ている。

それに少女は「『めんじめん、おじいちゃん』と、反省の色薄く応えている。ジジイは喚わかと埃を吸って咳き込んでしまうので、大きな声を出せないのでさう。いかにも“仕方ない”といった顔で、口を塞いでいる。

まあ、それはありがたいんだが……つかジジイ、商品よりも客を心配すべきだろ、客を。

「そんなことより、入つて入つて」

少女は遊びに来た友達を出迎えるように、軽く促す。

このノリはもう、俺が“客”だといつ認識がないんじゃないだろうか。あるいはジジイ共々、客商売のイロハを全く知らないかのどちらかだらう。

つていうか、俺、帰るところだつたんですけど……？

【星野 輝琉ルート#2へ】

星野 輝琉ルート#1（後書き）

いかがでしたでしょうか？
すいません、まだヒロインの名前が明かされていませんね。
次回には必ず……

星野 輝琉ルート#2（前書き）

遅くなりました。大変申し訳ありません。
楽しんでいただければ幸いですが……
これは『星野 輝琉ルート#1』の続きとなります。そちらへ進
んだ方は、第六幕を読む前にこちらをお読み下さい。

「さて、それじゃあ……」

と、少女の一聲で唐突に自己紹介が始まる。

別に俺は、“店員さん”と“お客様”で構わないのだが、何故だかこの場は、そういう流れになってしまった。この場の雰囲気というのは、かくも恐ろしいものなのか……

「俺は、天城 空だ……」

よろしくな、と言いかけてやめる。

俺は旅の身。別によろしくしてもらう必要がない。
人懐っこい彼女のことだ。そうしてしまえば“赤の他人”から“知り合い”さえも通り越して、あつという間に“友達”にまで昇華されてしまうだろう。

必要以上の人付き合い、人間関係を築くのはを好ましくないのだが……どうやら、そつもいかなくなってしまったみたいだな。

「私の名前は輝琉 星野 輝琉よ」

「よ」のところで、輝琉と名乗った少女はパチリと片目を閉じた。ウインクといつやつだ。

どうにも、俺は気に入られてしまったたらしい。

年上だろうか。その仕草も、整った顔立ちも、可愛いというよりは凜々しく見えた。

ジジイと違つて印象が良い。

「ワシの名前は星野 梨眩よ」

「やめろジジイ、気色悪い！」

ジジイが少女と同じ仕草をする。

彫りの深い皺だけの顔でウインク……しかも微妙に裏声を出しているからますます気持ちが悪い。

「なんじゃ、洒落のわからん奴め……」

そう言つてジジイが頬を膨らませる。

ふつくりと膨れたそれは、メロンパンのよつで……つて、ダメだ。どう取り繕つても気持ち悪い！

頼むから本当にやめて欲しい。吐き氣がする……

祈りが通じたのか、ジジイは渋々といった感じで、元通りの偏屈へんくつな顔に戻る。

「もう、おじいちゃん、お客さんをからかわないの」輝琉が諭すよつに言つた。

ん、待て。

そういうばたつきは何とな〜く聞き流してしまつたが、今「おじいちゃん」とて聞こえなかつたか？

「おじいちゃんがそんなんだから、お客が減つちゃうのよ」やつぱり「おじいちゃん」とて言つた……つてことば、まさか……

「一人は、家族？」

恐る恐る、尋ねてみた。すると輝琉は平然と、

「ええ、そうよ」

ずさつ！

思わず後ずさる。

そうして一人を同時に視界に收め、見比べた。

……悪いがはつきり言つて、これっぽつも似てない。まったくちつとも全然サッパリ似ていない。

『円とスッポン』なんて喻えさえも、侮辱の氣がする。もちろん、スッポンに。

「あ〜、ジヨーク？」

確認といつよりはお願ひのよつに。

だが、二人は全くの同じ仕草で互いを指し合つて、

「私のおじいちゃん」

「ワシの孫」

何故だろう、急に眩暈^{めまい}がしてきたぞ……

だが何故だろう、妙に納得もできてしまつ……

外見が全く似ていなから、サギだと叫びたくなるが、よくよく

考えてみると、中身は通じるところがある。

人懐つこいといふか、敷居^{しき}が低いといふか。

傍若無人^{ぼうじやくぶじん}といふか、天真爛漫^{てんしんらんまん}といふか。

いや、最後の表現はジジイには使いたくないものだな……何というか、そういつた“心の壁”みたいなものをあまり感じさせない、親近感のようなものを一人とも持つている。

「で、空は何しに来たの？」

あ、ほら。いきなり呼び捨てるこんなところが。

輝琉^{ひりゅう}はしつとした顔で話し掛けてくる。

もう完璧^{ばんぺき}に“友達付き合^い”の感覚だよ、コレは。まだ知り合つて十分も経つてないといふのに、呼び捨て。

これを“無礼”ととられれば、「別に何しに来てたつて、こいつの勝手だろ！」と文句を言いたくなる奴も出でてくるだろ。客足も遠のくはずだ。

とはいえ、俺にとつてはむしろ、ありがたいものだつた。

妙に敬語を使われるよりずつと気が楽だ。向こうがそのつもりなら、こつちも敬語を使つてやる必要はないし、それで文句を言わることもなかろう。

「帰るところだ」

というわけで、何を憚ることもなく、はつきりと答えてやる、俺。

いや、実際帰ろうとしてたところだし？

「へ？ 楽器、見に来たとかじゃないの？」

言いつつ、輝琉はジジイの方を見て、視線だけで問い合わせる。

そうしてジジイは、

「ああ。こやつはな…… ワシに逢いにきてくれたんじゃ！」

「またま通りかかつたんで、店内を覗かせてもらつただけだ。俺

も少しばかり音楽をかじつてゐるんでな

「見え透いたウソをつくんじゃない、ジジイ……」とか言つてや
るうと思つたが、なんだかもう、いちいちツツコツを入れてたら負け
のよくな氣がするので、冷静 もうジジイの発言を無視するく
らい に返答する。

ありがたいことに輝琉も、「あ、そつなんだ」と言つて、ジジイ
ではなく俺の言葉に応じてくれた。

「何の楽器をやつてるの、空は？」

「バイオリンだ」

「へえ、そうなんだ！ 調子はどう？」「

少し前にも、同じようなことを聞かれたな……
さてしかし、この問い合わせはどうやらだるい。

少し思案して、どちらとも取れる答えを返す。

「ぱちぱちだな。最近はあまりしていなか、どうなつているか
「そつか。じゃあ今度ウチに持つてきて。手入れしてあげる」
やつぱりバイオリン本体の方だったか。まあ楽器屋なんだから当然
だらうが、俺の“腕”について訊かれていたような気もする。
どちらにしたつて、大した腕じゃないし、答えは同じなんだが。
まあ、せつかく手入れをしてくれると言つんだ。次に来るときには頼むのもいいかもしれない。

なんてことを考えていたら、輝琉は、

「格安で…」

ああもう、お前らは血縁者だよ、本当

少し前の会話をまんまなぞりやがつて……

俺は思いつきり溜め息を吐いて、ぐるりと踵きびきを返した。

「気が向いたらな……」

やつぱり少し前の会話をなぞつて、俺は出口の扉を開け、後ろ手
を上げてそのまま店を後にした。

【第六幕へ】

星野 輝琉ルート#2（後書き）

いかがでしたでしょうか？

ようやく名を明かせました本作品もう一人のヒロイン、“星野輝琉”。

作中にあるように、天真爛漫に描ければいいのですが……何はともあれ、頑張ります。

第六幕

途中で見つけた小さなタバコ屋で煙草を買^{たばこ}い足し、もと来た道を辿^{たど}ってスーパーの前へ戻る。

「急^{いそ}いうつて言^いつたの、お兄ちゃんに……」

やつとのことで戻^{もど}つてみると、そこには不満^{ふまん}そうな顔をした蒼香^{あか}が、いっぱいの袋を両手にぶら下げて立っていた。
そういうば、店に入る時も不満^{ふまん}そうだったな。

「悪かった。自販機を探してたら、道に迷^{めい}つちまつたんだよ

「……」

適当に誤魔化^{じまか}そうとしたが、それが返^{もど}つてまずかったのだらう。
蒼香は相当地^じじけてしまつたらしく、帰る道すがら、何とか^ご機嫌^機を取^とうとして、またかなりの時間を要することになった。

その間、また亀の歩みになつていたことは、言^いつまでもない。

駅前の賑やかさからも、商店街の活氣からも遠く離れた、閑静な住宅街。

アスファルトの道路脇に立ち並ぶは、アスファルトの壠^いと無機質な電信柱。

空を覆^ふは、黒や鼠色^{ねずみいろ}、茶色といつた暗色の屋根と風情の欠片もない電線。

どこを見ても人工物だらけの味氣ない世界ではあるが、それでも時折、壠の向こうに見える庭の緑と木造の門のおかげで、辛うじてここがまだ生物の存在し得るといひことがあることがわかる。

その道路の真ん中を、俺と蒼香は一人して歩いていた。

まだ出逢つて幾程も経つてはいないというのに、それがさも当然であるかのように、二人並んで。

しかもムダに距離が近い。

「もう少しで着くからね」

蒼香はそんなことを全く気にもしない様子で、もう四回目になる言葉を口にする。

「さつきから『もう少し』と言つてるが…… いつになつたらお前の家に着くんだ？」

「うん、もう少しだよ」

はい、五回目。あと何回この台詞を聞くことになるのだろう。

正直、もう耳が痛い。頭も痛い。ついでに言つと腕も痛い。

スーパーで待たせてしまつた、そのおわび（ご機嫌取り）として、俺は全五つの買い物袋のうち、その大半の四つの荷物を持つことになった。

両手に荷物を二つぶら下げる、バイクの両手にも二つ持つてもらつていて。キャリアには、バイオリンが入つていてるので、こいつあるしかない。

どのみち、その全重量は俺の腕にかかるわけだから、そりや疲労もするというのだ。

「……いつになつたら着くんだ？」

俺はそんなことをできるだけ気にしないように、もう五回になれる言葉を口にする。

「もう少し」

六回目の言葉は、やつぱり信憑性しんぴょううせきに欠けていた。

第六幕（後書き）

いかがでしたでしょうか?
ノンビリ下さいませんが、気長にお付き合いくださると嬉しいです。

第七幕

「到着！ ここが私のお家だよ」

蒼香がバスガイドよろしく、左手を大きく横に突き出して、『右手をご覧下さい』ポーズを取る。

差し出された手の先には、いささか古風で、小さな日本家屋が建つていた。

「や、やっと着いたのか…… 疲れた……」

ようやく荷物を降ろせる。

もうあれから、何度『もう少し』と聞いたかしれない。というか、『いつになつたら』、『もう少し』の会話しかしていないような気がする。

「ただいま」

蒼香が門扉を開けて中へ入っていく。

つていうかおい、荷物運ぶの手伝え！

俺に四つ全部を家の中まで運ばせる気か？

と、言つたところで立ち止まりそうにないので、仕方なくバイクを引いて蒼香についていく。

門を潜ると、小さいながら庭付きの家であることがわかつた。

庭先の縁側は誰の趣味だろう？

丸くなる猫を隣に、のんびりと茶でも啜るのは気持ち良さそうだ。秋も深まってきた今の時期では、寒くて仕方ないだろうが。整えられたこの庭にバイクを入れるのも無粋なので、少し狭いが玄関前にバイクを止めることにした。

蒼香がそれに合わせるように、玄関の扉を開く。

「ただいま」

「ああ、おかえり蒼香」

と、間髪入れずに返事をしたのは、なんと中年の男。

「今日は随分と遅かったね」

「ちょっと、ね。あはは……」

やりとりから察するに 蒼香の父親だらう。

「す、すぐ」飯の用意するからね、お父さん

ほらね…… ああ、なんとなく氣まずい。

愛娘が男を連れて帰ってきた。

しかも、帰りはいつもより“隨分と”遅いらしい。

この状況をあの“父親”といつ生物は、どう捉えるのだろうか。

「おや、そちらの方はどうなたかな？」

「そーら、來た…… さて、どうしたものか。

「あ、ええと…… この人は、“天城 空”さん。ちょっと迷惑を

かけちゃって……」

と、俺の助け舟となつたのは、隣に立つ蒼香だつた。

そう切り出すと、彼女は俯きがちに言葉を紡ぐ。

「そのお詫びに、夕ご飯に招待したの。いい、よね？」

「“空”…………ふむ…………」

蒼香の父親は、眼鏡の向こうの瞳を細めて、じつとこちらを見る。娘が連れてきた男に興味津々なのか、あるいは品定めでもしているのか。

年の頃は四十代と言つたところか。

線の細い、スラリとした体躯^{たいく}。ややこけた頬に鬍^{ひげ}はなく、髪もさ

っぱりと短くまとめられて、清潔感が漂つている。

家の様式に揃えているのか、落ち着いた和装がよく似合つていた。多分、庭先の縁側はこの人の趣味だろう。

どうでもいいけど、あの眼鏡、高そうだな……

「うん、いいよ」「うん、いいよ

と、不意に眼鏡の奥の瞳が笑顔のそれに変わつた。

とても優しい声で、彼は“俺たち”を迎える。

「おかえりなさい。そんなにたくさん荷物じゃあ、疲れただろう?

? 早く上がりなさい」

「うん。お父さん、ただいま」

蒼香が大きく頷いて、靴を脱ぐ。父親に許可されたのがそんなに嬉しかったのか、こちらも笑顔満開だ。父親のものとはどこか質が違つように見えるが。

「あ……えつ、と……」

蒼香が家に入つていくのを見送つて、一人残された俺は抱えた荷物の重さも忘れ、困惑に目が泳ぐ。

やがて正面に立つ和装の男の瞳に泳ぎ着くと、

「おかえりなさい」

やはり、笑顔で父親は言つ。

その大きいと思てしまつ優しさに、分も忘れて思わず、答えて

しまつた。

「ただいま」

父の笑顔が、より深まつていた。

第七幕（後書き）

いかがだったでしょうか?
家に行くなんてそつくりですよね、すいません。
どうぞご容赦下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9312b/>

空に馳せる想い【長期休載中】

2011年1月8日02時49分発行